

開催のごあいさつ

立命館大学加藤周一現代思想研究センターと東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターは、2017年12月に研究提携協定を締結しました。この協定にもとづいて、これまで3回にわたり両研究センターによる共同展示を企画し、双方の大学キャンパスとウェブ上で同時に公開してまいりました。これは、両センターが保有する資料を利用した企画として立案し、研究成果として学生や市民に公開し、社会に還元することを目的としてきたものであります。

この共同展示の第1回は「君たちはこれからどう生きるか：丸山眞男と加藤周一から学ぶ」(2018年)、第2回は「〈おしゃべり〉からはじまる民主主義」(2019年)、第3回は「我を人と成せし者は映画：加藤も丸山も映画大好き！」(2020年)と題して公開しました。

今回は、今年と来年の2年連続で加藤周一と丸山眞男の生い立ちを紹介する展示を企画いたしました。その前半部分となる今年の展示では、「知識人の自己形成：丸山眞男と加藤周一の出生から敗戦まで」というテーマで、加藤と丸山が生まれ育った家庭環境、時代、友人や教師、読書、趣味などを包括的に、時系列的にご紹介します。

加藤と丸山の幼年時代、第一次世界大戦以後の日本は、その前後に比べれば周囲の国際関係が安定し、国内的には自由化と民主化が進行した時代でした。彼らが住んだ大都市ではモダニズムと大量消費の文化が花開きます。しかし昭和期に入ると、1931(昭和6)年の

満洲事変、1937(昭和 12)年の日中戦争開始を経て、日本は急速に戦時体制へ向かっていきます。

こうした時代の転変は、とりわけ多感な青年たちに強烈な影響と印象を与えました。加藤と丸山もまた、さまざまな機会にみずからの少年期・青年期を振り返っています。

時代の影響はもちろん多かれ少なかれ当時の青年たちに及んだものですが、それに対する向き合い方のなかには加藤と丸山の知識人としての萌芽が見られます。そこには、彼らが成長してきた環境に独自のものがあつたことが作用していたといえましょう。

各人の個性は環境だけによって左右されるものではありませんが、この二人に知識人としての自己形成を促した背景には、成長過程で彼らが周囲から受けとつたものが存在していたことは否定できません。

本展示では、加藤と丸山という知識人を形づくつたものは何だったのか、周囲の人や事物から何を学んだのかを時期別に読みとれるように構成いたしました。加藤と丸山について、さらに広く人と人、人と時代のかかわりについて、何らかの示唆を与えることができましたら幸いです。

なお、今回は昨今のコロナ禍を考慮してウェブ上の展示を中心とし、会場では縮約版をパネルで展示することといたしました。

2021年12月23日

立命館大学加藤周一現代思想研究センター長 加國尚志

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 和田博文